

1年～3年 【計算記号の歴史】

毎日のように使っている計算（演算）記号は、誰がいつ頃発明したのでしょうか。

現在使われている一般的な記号の歴史はそれほど古くなく、ほぼ17世紀までにヨーロッパで定着したようです。そして、日本では明治以降一般に使われ広まりました。

【+と-】

起源には諸説があり、船乗りが樽の水を使ったときに、使った量を「-」と樽に横線を引き、なくなった水を補充し満タンにしたら、その印として、横線の上から縦線を引いて横線を消したのが「+」の始まりという説がある。また、船乗りの代わりに、ブドウ酒売りの商人という説もある。

出版物で初めて現れるのは、独国のヨハネス・ウィッドマンが『商業用算術書』（1489）の中で、過不足を表すものとして使い、次第にヨーロッパに広まっていった。

「+」はラテン語の“et”（英語の and）を単純化したもので、「-」は“minus”の頭文字「m」の筆記体から生まれたとされている。

et → e → l → t → +
m → ~ → -

【×】

1618年にエドワード・ライトがネイピアの『対話』の注釈を出版した時に大きい

「×」を乗法記号として使ったのが始まりである。

今の「×」は、英国のオートレットの『数学の鍵』（1631）で初めて使われた。しかし、「×」とアルファベットの「X」が混同しやすかったため、欧州ではそれほど普及しなかった。ライプニッツが用いた「・」は、今でも乗法記号として用いられている。

【÷】

出版物で初めて用いたのはスイスのラーンで代数の本（1659）である。

しかし、欧州ではライプニッツの影響が強く、「:」が広く用いられた。一方「÷」はワリスやニュートンに採用されてから、英国や米国で次第に使われるようになった。

なお、分数の形式である「/」を除法記号として使っている国も多い。

【=】

英国のロバート・レコードが『知恵の砥石』（1557）で初めて使った。

「2本の平行線ほど世の中に等しいものは存在しない」という理由からだったようである。次第に著名な数学者らが使うようになり普及していった。

《参考文献》

- ・上垣 渉『算数・数学授業を楽しくする数学史の話』（明治図書出版／1990）
- ・片野善一郎『授業を楽しくする数学用語の由来』（明治図書出版／1988）